

認知的・構造的社會關係資本と ジェンダー問題

杉 原 名 穂 子

1. ジェンダーと社會關係資本

1-1. 社會關係資本をめぐる議論

社會關係資本（ソーシャル・キャピタル）への注目は各分野で著しく、日本においても健康・教育・地域づくり・介護・子育てなど多くの課題に関連して調査研究が行われている。しかし、社会学においては従来、人間関係やネットワークがもたらす効果は重要な分析テーマの一つであり、特に目新しいものではない。にもかかわらず、21世紀にはいり、特にこの概念が脚光をあびているのは、R. パットナムの業績の影響によるものだといえる。social capital は、社会学でも特に教育の分野で、J. コールマン、P. ブルデューらが提唱していたが、これらは個人が用いる資源として、人的資本、文化資本、経済資本などととも分析されていた。いわば個人ベースの概念だったといえる。これに対し、パットナムはコミュニティベースの概念として注目し、地域コミュニティがもつネットワークや規範がもたらす利益についてとりあげた。個人化がすすみ、地域コミュニティや家族の力が弱体化している社会状況をかながみれば、いわゆる絆の再構築と活性化にさまざまな社会問題解決の一つの方法を見出そうとするのももっともであろう。実際、日本では内閣府が2002年に初めて社會關係資本を総括的に把握するための調査を実施しているが（内閣府2003）、そこでの最大の注目は、社會關係資本がもつ地域活性化の機能であった⁽¹⁾。

しかし、ジェンダーと社會關係資本となると、その研究はそれほど肯定的なものばかりではなかった。むしろ、ジェンダー研究者は社會關係資本に関しては沈黙するか、あるいは批判を向けることがこれまで多かった。それは社会関

係資本の概念がしばしばノスタルジックな社会観を提示することと関係する。パットナムが、社会変化が人々の紐帯を弱体化させた、女性の市場労働への参加が社会関係資本を減少させた、と述べたことは (Putnam1995)、結局、社会関係資本の創出という政策は、女性を伝統的な役割に結びつけるだけではないか、という警戒を呼び起こすことにもなった。特に、開発とジェンダーの研究者は、世界銀行や OECD の積極的な社会関係資本アプローチは、ネオリベリズムの影響の下、ワシントン合意以降の経費削減の動きを女性のアンペイドワークで埋め合わせようという政策ではないかと批判した。実際、南米社会を分析した M. モリヌーは、社会関係資本の創出は伝統的に女性のアンペイドワークに頼っており、その推奨は女性にとって重荷と化すこと、社会におけるジェンダー秩序が社会関係資本から女性が利益を得ることを制限していること、単にジェンダーの不平等を反映するだけでなくそれを永続化するのに貢献していること、などの現状を指摘する (Molyneux2002)。

これまでの多くのネットワーク分析は、「同じネットワークはある点ではポジティブな社会関係資本となり、別の点ではネガティブなそれとなることを示してきた」。「ネットワークは、ジェンダー問題について女性と同じく男性にも影響を与えるのであれば、女性にとってよりよい社会関係資本となる」(Erickson, 2006:320)。社会関係資本の醸成が社会にポジティブな影響を与えるというならば、それはジェンダー公正と結びつく方向でなければならない。つまり、それがジェンダー研究者の姿勢ということであろう。

1-2. 社会関係資本の分配と類型

パットナム自身は、社会関係資本の減少や創出に果たす役割についてのみ、ジェンダーの問題に関心を示している。彼の関心はもともと、コミュニティの社会関係資本の量がもたらす利益にあり、そのマイナス面についてはそれほど注意を払っていない。

これに批判的なジェンダー研究者が注目するのは、P. ブルデューの議論である (O' Neill & Gidengil 2006)。彼の社会関係資本の定義は、「多かれ少なかれ制度化された相互認識の持続的なネットワークの保持 — すなわち集団のメン

バーシッブーに結びついた現実的あるいは潜在的資源の総計」(Bourdieu1986:248)である。この資源に対し、ブルデューは批判的洞察を加え、そのネットワークの維持には時間とエネルギーの実質的な投資が必要であること、しかし、時間とエネルギーの量は人によって違いがあり、特に経済資本が関与する度合いが大きいことに注意をうながす。社会関係資本は「経済資本の仮装した資本である」(Bourdieu1986:253)。もちろん、彼はマルクスに多大な影響をうけながらも、経済決定論に批判的な社会学者であり、社会関係資本を経済資本に還元することには距離をとろうとする。しかし、階級などサブ集団間の力関係に注目し、社会の不平等な構造の維持・再生産に資本が関与するプロセスを明らかにしようという彼の態度は、ジェンダー間の力関係に注目するジェンダー研究者には大きな示唆を与えることになった。

パットナムの孤独なボウリング論が登場した後、イギリスでの社会関係資本を測定した研究者に S. ホールがいる。彼は、イギリスでは社会関係資本は減少していない、また女性の市場労働への参加が社会関係資本を減少させたりもしない、とパットナムとは異なる社会分析を行った (Hall 1999)。ホールもまた、資本の不平等な分配に着目し、社会関係資本は公共財というだけでなく、クラブ財としての性質をもち、ある集団が自らの利益を得るために有利に用いるものだと述べる。ただし、階級と世代、すなわち労働者階級と若者に社会関係資本が少なく分配されていることは問題視したが、ジェンダー問題に関してはその分析では触れていない⁽²⁾。

ホールのこの研究には、もう一つ示唆に富んだ指摘がある。彼が階級の議論とからめて、社会関係資本の質を論じたことである。労働者階級は、よりローカルなコミュニティと結びついていたために、都市化、産業化の進展でコミュニティが弱化したことは、労働者階級の社会関係資本に打撃を与えた。他方で、ミドルクラスにとって、コミュニティの弱体化は社会関係資本にそれほど影響を与えない。地域社会のつながりのもつ意味が階級によって異なるというこの視点は、ノスタルジックな社会観とは一線を画すものといえる。

以上、ブルデューやホールの議論から、社会関係資本について、コミュニティレベルではなく、サブ集団に分類し、そこで働く権力作用に注目すること、

他者とのネットワークは豊かか貧しいかという量的なものだけでなく、どのような結びつきかその質と意味について考えること、などがジェンダーと社会関係資本を検討する上で有用な方法論として導き出される。

1-3. 問題の設定

これまでに、ジェンダー研究が社会関係資本にもたらした知見として主に次の二つがあげられる。一つは構造的な側面、男女による資源の配分や役割分担の布置に関連するものであり、二つめは権力作用に関するものである。

まず、構造的な側面では、男性は職場や地域社会など公的な場、女性は家族を主とする私的な場、という性別分業がある。また、公的な場における分業として、職場や地域コミュニティ、組織等における男女の活動の違いと特徴が分析される。その結果、女性のネットワークは男性にくらべてよりインフォーマルで、結合型、水平的、小集团的、包含的といった特徴をもつことが明らかにされてきた（パトナム2000, Foster & Meinhard 2005, O'Neill & Gidengil 2006, Field 2008, 西出2005, 宮田・池田2011）。

権力関係に注目する視点では、女性の他者性が問題とされる。女性は独立した主体としてよりも、他者をケアする役割を与えられており、社会関係資本創出に大きく貢献しているものの、その資源は主に他者のために用いられる。V. ローデスは、従来の社会関係資本研究では女性のケア・ネットワークが無視されていると問題提起する。女性の活動はケア、共感、思いやりなどで特徴づけられており、この活動は、「その日その日をうまくやっていくこと」にむけられ、政治的活動や地域の将来に関わる活動にむけられたりはしない（Lowndes 2006）。女性のケアワークは、時間的に不安定でネットワークをつくる時間的柔軟性も欠けているため、特に垂直型の社会関係資本をつくることができないという指摘もある（Bezanson 2006）。

この二つ、すなわち構造的側面と権力関係の側面をあわせて、男性は公的領域、女性は私的領域、あるいは資本主義や市民社会と、家族や家父長制という二重のシステムを論じるのが、ジェンダー論の重要で複雑な社会科学への貢献である。つまり、ジェンダーの方法論が社会関係資本研究に導入された場合、

単に、地域社会における紐帯の量や型だけでなく、この二重のシステムの視点がとりいれられる必要がある。

日本での調査研究も、多くは、地域社会や職場における質問項目をたてている(後の表2を参照)。しかし、ジェンダー研究においては、女性のケア活動を無視することはできない。そして、1-1で論じたように、社会関係資本を創出・蓄積する政策が、ジェンダー問題に貢献するののかも問われなければならない。したがって、本稿では以下の課題をたて、調査データを用いて検討を加える。

課題1：社会関係資本となる活動や規範意識はケア活動とどのような関係にあるのか。

課題2：社会関係資本はジェンダー問題に貢献するのか。

2. 調査の概要と社会関係資本の定義

2-1. 調査の概要と回答者の属性

まず、本稿で用いる調査についての概要を説明する。

調査は2012年3月～6月、新潟県新潟市において調査票を郵送で配布・回収する形式で行った。新潟市は2005年に大合併を行い、2007年に政令指定都市になった。人口は約80万人。大都市の衛星都市というよりは独立した地方の一都市であること、また合併を経たことにより、伝統的な住民が多く住む地区、開発による新規来住者が多い地区、農村や漁村など、さまざまな地区をもつことから、社会関係資本のあり方を問うに適している都市ともいえる。新潟市在住の20-89歳の男女(2012年1月1日現在)652,000人を母集団とし、住民基本台帳より系統抽出法により抽出した3,070人を調査対象とした。有効回収票は1,315(回収率42.8%)である。

回答者の男女比率・年齢比率は表1の通りである。なお、住民基本台帳での実際の人口構成比(2012年1月段階)を比較のためカッコ内に示した。実際の人口構成と比較すると、区によって違いはあるものの、男性より女性の方が回答者の割合が高い。年代では60-70代の回答率が高く、20-30代の若年層の回答

表1 年代別男女別回答者率（および実際の住民構成比率）

	全市	20代	30代	40代
計	100% (100%)	7.1% (12.9%)	13.3% (17.0%)	13.7% (16.2%)
男	42.9% (48.0%)	2.8% (6.5%)	4.8% (8.6%)	4.8% (8.1%)
女	57.1% (52.0%)	4.3% (6.4%)	8.6% (8.4%)	9.0% (8.1%)
	50代	60代	70代	80代
計	16.0% (16.0%)	24.3% (17.8%)	17.6% (12.7%)	8.1% (7.3%)
男	8.5% (7.9%)	10.9% (8.6%)	8.5% (5.6%)	2.7% (2.6%)
女	7.6% (8.0%)	13.6% (9.2%)	9.1% (7.1%)	5.1% (4.7%)

率が低い。ただし、女性については、若い層でも回答しているものが多く、とりわけ40代以下の若い男性の回答率が若年層の低さの要因といえる。

2-2. 社会関係資本の操作的定義

「社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」（パットナム、2000=2006, 14頁）。パットナムは、この3つを社会関係資本（以下 SC）の要素と定義し、その後の日本での調査に大きな影響を与えた。内閣府がおこなった調査でもその定義は踏襲され、「ソーシャルキャピタル(Social Capital)とは『ネットワーク(社会的な繋がり)』『規範』『信頼』といった社会組織の特徴で、共通の目的に向かって協調行動を導くもの」（内閣府、2003）とし、つきあい・交流、信頼、社会参加（互酬性の規範）の3つの指数を作成した。農水省（2007）、日本総研（2008）、その他多くの調査研究でもそれらの指標を参考にすることが多い。

パットナムはまた、ボンディング型（結成型）、ブリッジング型（橋渡し型）という類型化をおこなったが、その他、SCをはかる調査では、規範的な要素（認知的 SC）とつきあいやネットワークを問う構造的な要素（構造的 SC）という二つの類型に注目したものも多い。三菱総研（2011）の調査では、それらの類型を考慮した質問項目を設定している（表2）。

これらの調査をふまえ、今回の調査でも、認知型と構造型の二つの SC 指標

表2 社会関係資本の指標

	内閣府（2003）		日本総合研究所（2008）
	標準化した後、単純平均値を算出		
つきあい・交流	隣近所とのつきあいの程度 隣近所とつきあっている人の数 友人・知人とのつきあいの頻度 親戚とのつきあいの頻度 スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況		隣近所とのつきあいの程度 隣近所とつきあっている人の数 友人・知人とのつきあいの頻度 親戚とのつきあいの頻度 スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況
信頼	一般的な人への信頼 旅先や見知らぬ土地での信頼 近所の人々への信頼度 友人・知人への信頼度 親戚への信頼度		一般的信頼 旅先・見知らぬ土地での信頼
社会参加	地縁的な活動への参加状況 ボランティア活動行動者率 人口一人あたり共同募金額		地縁的な活動への参加状況 ボランティア・NPO・市民活動への参加状況
統合指数	上記3つの個別指数の単純平均値		ボンディング指数 近隣でのつきあいの程度 地縁的な活動への参加状況
			ブリッジング指数 友人・知人との学校・職場外でのつきあいの頻度 ボランティア・NPO・市民活動への参加状況
三菱総合研究所（2011）			本調査での指標（標準化した後、単純平均値を算出）
認知型	結合型	地域・友人・家族への愛着・信頼 地域の人の役に立とうと思うか（互酬性）	一般的信頼 特定化信頼
	橋渡し型	社会一般に対する信頼感 他人の役に立とうと思うか 多様性に対する関心 社会・政治のシステムに対する理解 社会・政治への関心	区役所 学校・病院等の公的施設 自治会等の地縁組織 ボランティアやNPOの組織 近所の人 職場や仕事関係の人 親戚 それ以外の友人・知人
構造型	結合型	地域内の個人間の人的ネットワーク 地域型団体加入の有無（町内会・自治会）	友人数 親戚の人、近所の人、職場や仕事関係の人 子供の学校関係の人、育児や介護関係の人 娯楽や趣味の友人、学校時代からの友人
	橋渡し型	多様な人的ネットワーク ボランティア・クラブ・老人会・OB会への加入有無 ボランティア・NPO・寄付・住民運動等への参加の有無	活動 地縁的な活動 スポーツ・趣味・学習・娯楽活動 ボランティア・NPO・市民活動 PTA活動

を作成した。認知型 SC として一般的信頼と特定化信頼を問う項目を、構造型 SCとして日頃親しくしている友人の数と活動の頻度を問う質問を設定した(表2)。特定化信頼は「あなたは日常生活の問題や心配ごとについて、相談したり頼ったりする人や組織がありますか?」という質問に4段階で、活動については「現在、次のような活動をされていますか?」という質問に「毎日～週数回」から「活動してない」まで同じく4段階で回答してもらった。友人数については、「日頃親しくしている友人は何人くらいいますか?」という質問に実数を記入してもらった。

なお、社会関係資本については、共同体レベルと個人レベルの二つの測定レベルがあるが、ジェンダーについては個人レベルの設問が適合するため、パトナムのような共同体レベルの概念化は分析に用いなかった。

2-3. 性別によるクロス集計

まず、それぞれの質問項目について、男女別のクロス集計または平均友人数の t 検定を行い、有意差がある項目について確認したところ、表3の結果になった。これより次の特徴が指摘できる。信頼感については、親戚と友人以

表3 社会関係資本と性別のクロス表/カイ二乗検定・t検定結果

認知型		構造型	
一般的信頼	ns	友人数	
		親戚	**
特定化した信頼		近所	ns
		職場	***
区役所	*	子どもの学校関係	***
公的施設	ns	育児・介護関係	**
地縁組織	ns	娯楽・趣味	ns
ボランティアやNPO	ns	学校時代から	ns
近所の人	ns	活動	
職場や仕事関係の人	ns	地縁活動	+
家族	ns	スポーツや趣味	ns
親戚	*	ボランティア・NPO	ns
それ以外の友人	**	P T A	**

***は0.1%水準、**は1%水準、*は5%水準、+は10%水準で有意だったもの

外、ほとんどの項目で男女差が認められない。他方、構造型 SC については、多くの項目で男女の違いがみられるが、地域活動や親戚関係は男性が、PTA や介護関係は女性が活潑なネットワークをもっている（表4、表5）。マクロ社会のジェンダー編成が日頃のつきあいや活動にあらわれており、男性が地縁・血縁的なもの、女性がよりインフォーマルでケア的なものを保持するという特徴が確認できる。

表4 特定化信頼・活動と男女別のクロス表

特定化信頼	頼りにしている	ある程度頼りにしている	あまり頼りにしていない	ほとんど頼りにしていない	合計	
区役所	男性	38 8.7%	106 24.3%	127 29.1%	165 37.8%	436 100.0%
	女性	27 4.7%	162 28.4%	158 27.7%	224 39.2%	571 100.0%
	合計	65 6.5%	268 26.6%	285 28.3%	389 38.6%	1007 100.0%
親 戚	男性	201 40.8%	198 40.2%	68 13.8%	26 5.3%	493 100.0%
	女性	267 41.1%	225 34.7%	91 14.0%	66 10.2%	649 100.0%
	合計	468 41.0%	423 37.0%	159 13.9%	92 8.1%	1142 100.0%
それ以外の 友人・知人	男性	74 16.5%	184 41.1%	89 19.9%	101 22.5%	448 100.0%
	女性	155 25.7%	248 41.1%	107 17.7%	93 15.4%	603 100.0%
	合計	229 21.8%	432 41.1%	196 18.6%	194 18.5%	1051 100.0%
活 動	毎日～ 週数回程度	週1～ 月数回程度	月1回～ 年数回	活動してい ない	合計	
地縁的な活動	男性	9 1.8%	42 8.5%	150 30.2%	296 59.6%	497 100.0%
	女性	11 1.7%	34 5.3%	168 26.4%	424 66.6%	637 100.0%
	合計	20 1.8%	76 6.7%	318 28.0%	720 63.5%	1134 100.0%
P T A 活動	男性	0 0.0%	5 1.2%	22 5.1%	402 93.7%	429 100.0%
	女性	3 .5%	8 1.4%	65 11.1%	511 87.1%	587 100.0%
	合計	3 .3%	13 1.3%	87 8.6%	913 89.9%	1016 100.0%

表5 日頃親しくしている友人数／男女別平均値

	性別 (n)	平均値 (人)	標準偏差
親戚の人	男性(510)	5.6078	7.37590
	女性(700)	4.2957	5.44813
近所の人	男性(510)	3.6235	7.92198
	女性(700)	3.1650	5.07042
職場や仕事関係の人	男性(510)	6.1529	10.42383
	女性(699)	3.6946	7.48782
子供の学校関係の人	男性(510)	.5059	2.85177
	女性(699)	1.2539	3.87265
育児や介護関係の人	男性(510)	.1549	.82539
	女性(699)	.3841	1.68769
娯楽や趣味の友人	男性(510)	3.7255	7.94425
	女性(699)	3.5443	6.58215
学校時代からの友人	男性(510)	3.4196	6.12063
	女性(699)	3.1144	4.71438

3. 社会関係資本とケア活動

3-1. 主成分分析と成分プロット

一般的信頼については「一般的に人は信頼できる」「一般的に他人に対しては注意するにこしたことはない」の二つのうちどちらの意見に近いかをたずね、4段階で回答してもらった。それ以外の、特定化信頼、友人数、活動については、複数の項目を設定して回答してもらったため、各質問項目について回答を標準化し（平均0、標準偏差1に変換）、主成分分析を行った。

① 認知型 SC：特定化信頼

3つの主成分で62.4%の寄与率である(表6)。第1主成分はすべての項目で正であり、信頼度を表す変数と考えられる。第2主成分は家族や親戚、友人などが+、区役所、学校や病院等の公的施設、自治会等の地縁組織などが-になっていることから、知人への信頼と組織への信頼という軸と推測する。第3

表6 特定化信頼の主成分分析結果

	成 分		
	1	2	3
区役所	.675	-.372	-.034
公的施設	.667	-.319	-.086
地縁組織	.764	-.296	-.088
ボランティアやNPOの組織	.650	-.240	.217
近所の人	.681	-.029	-.146
職場や仕事関係の人	.495	.324	.500
家族	.400	.677	-.358
親戚	.598	.457	-.407
それ以外の友人・知人	.399	.404	.613
寄与率	36.57%	14.67%	11.15%
累積寄与率	36.57%	51.25%	62.40%

主成分は、それ以外の友人・知人、職場や仕事関係の人、ボランティアやNPOの組織が+、親戚、家族、近所の人が一であることから、橋渡し型—結合型を表す変数だと考えられる。区役所、公的施設、地縁組織は値が低いものの、第3主成分の負荷量から、結合型の指標として、区役所、公的施設、地縁組織、近所の人、家族、親戚を、また橋渡し型の指標として、ボランティアやNPOの組織、職場や仕事関係の人、それ以外の友人・知人のスコアを選択し、それぞれの単純平均値を算出した。なお、クロンバックの信頼性係数を確認したところ、結合型の特定化信頼は0.749、橋渡し型は0.521である。

② 構造型 SC：活動

表7が分析結果である。第1主成分はすべてが+であるが、第2主成分では、PTA活動とスポーツ・趣味・娯楽や学習などの活動が大きく対比している⁽³⁾。一般に、地縁活動を結合型、ボランティアや市民活動を橋渡し型とすることが多く、ここでもその分類を適用するが、それ以外に、個人的な活動とケア活動という型を新たにたてることにする。

表7 活動の主成分分析結果

	成分	
	1	2
地縁的な活動	.677	.112
スポーツ・趣味・娯楽	.481	-.711
ボランティア・NPO・市民活動	.726	-.090
P T A活動	.476	.696
寄与率	36.12%	25.26%
累積寄与率	36.12%	61.38%

③ 構造型 SC：日頃親しくしている友人数

友人数を主成分分析したところ、二つの主成分が析出されたが、男女でパターンに多少違いがあるので、男女別の結果を示した（表8，図1）。累積寄与率はどちらも50%以下とやや低くなっている。第1主成分はどの項目も+になっているので、親密さを表す変数と考えられる。男性で「子供の学校関係の人」「育児や介護関係の人」の関連度が弱いのが特徴である⁽⁴⁾。

第2主成分についてみると、男性では4つのグループに分類できる（図1）。親戚、近所（結合型）、職場（橋渡し型）が対極に位置し、その間に趣味・娯楽の友人と学校時代からの友人（個人的な友人）がいる。育児介護関係の友人と、子供の学校関係の友人（ケアつながりの友人）は地縁型より橋渡し型に近い。

他方、女性では、ケアつながりの友人は個人的な友人と対極的で、結合型に近い。また、職場のつながりは、個人的な友人に近い。この男女の違いは、社会のジェンダー秩序を反映したものと考えられる。ケア活動は、女性にとっては地縁的なつながりに近く、職場は女性に対してより個人的なつながりを提供する場という仮説がたてられる。

④ 各指標の相関関係

クロス表で男女差があまりみられなかった認知型 SC では、結合型、橋渡し型という二つの類型で指標化した。ジェンダー差がよりあらわれやすい構造型 SC では、一般によく用いられる結合型、橋渡し型だけでなく、ケア的な SC と個人的な SC という分類も新たに提示する。ここでは、以下のように分類し、

活動と友人の各項目の単純平均値を算出し、構造型 SC の指標とした。なお、各指標の相関係数は表 9 である。

結合型：地縁的な活動 + (近所の友人, 親戚の友人) (クロンバックの $\alpha = 0.468$)

橋渡し型：ボランティア・NPO・市民活動 + 職場や仕事関係の友人 ($\alpha = 0.071$)

表 8 友人数の主成分分析／男女別

男 性	成 分		女 性	成 分	
	1	2		1	2
親戚の人	.659	-.459	.643	-.119	
近所の人	.588	-.551	.683	.235	
職場の人	.634	.441	.688	-.247	
子供関係	.296	.434	.431	.541	
育児や介護関係	.205	.459	.341	.659	
娯楽や趣味の友人	.640	.062	.546	-.148	
学校時代からの友人	.688	.123	.632	-.462	
寄与率	31.38%	16.01%	33.61%	15.61%	
累積寄与率	31.38%	47.48%	33.61%	49.22%	

図 1 友人数の主成分分析成分プロット／男女別

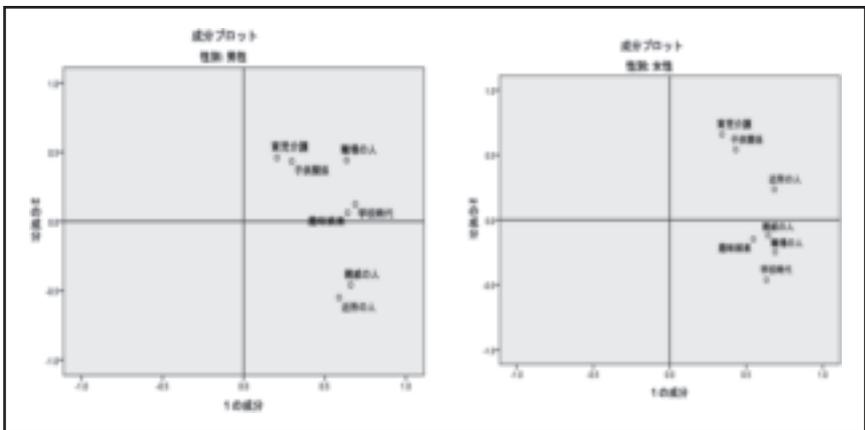


表9 各指標間の相関係数と男女差

	認知型SC			構造型SC			
	一般的信頼	特定化信頼		結合型	橋渡し型	個人型	ケア型
		結合型	橋渡し型				
一般的信頼	1	.214***	.213***	.087**	.142***	.075*	.090**
信頼:結合		1	.487***	.431***	.126***	.099**	.165***
信頼:橋渡			1	.188***	.321***	.214***	.186***
構造:結合				1	.345***	.264***	.188***
構造:橋渡					1	.357***	.197***
構造:個人						1	.059
男女差	ns	ns	ns	男>女**	ns	ns	女>男***

***は0.1%水準, ** は1%水準で有意

個人型：スポーツや趣味・学習・娯楽活動+(学校時代からの友人, 娯楽や趣味の友人) ($\alpha = 0.460$)

ケア型：PTA活動+(子供関係の友人, 介護関係の友人) ($\alpha = 0.626$)

クロンバックの α は橋渡し型のみ極端に低い, 橋渡し型と個人型をあわせると0.504となる。いずれにせよ, この二つの指標には男女差はあらわれない。社会関係資本でもっとも男女の違いが表面化するの, 構造的な SC の結合型とケア型だといえる。

構造的 SC のケア型×個人型をのぞいて, それ以外の各指標間で正の相関が認められるが, 一般的信頼については, それほど強い関連はみられない。この指標については, 橋渡し型の SC に分類されることが多いが, 一般的信頼の説明力の弱さについては従来の調査でも指摘されており(稲葉, 2011), 今回扱うデータでもこの位置づけについてはさらに検討が必要だと思われる。また, 稲葉(2011)の調査では, 地縁活動と NPO やボランティア活動の関連が強いとされたが, 地方都市を対象にした今回の調査でもその傾向はやはり認められる。

3-2. 社会関係資本と政治意識・ジェンダー意識の相関

社会関係資本は, 市民意識や経済活動との正の関連が注目され, その涵養が主張されてきた。政治学者であったパットナムは, 特に社会関係資本が自由や

平等、寛容性といった人々の意識を高めると論じる（パットナム2000=2006）。SCが異質な人々との連帯を高め、寛容で公正な社会につながるために、結束型より橋渡し型の重要性を唱える論者も多い。他方で、ジェンダー研究者は、過度なSCの強調が、女性の伝統的役割を強化し、差別的状況を維持・再生産するのではないかと危惧してきた。

では、社会関係資本は男性と女性それぞれの意識面にどのような影響を与えているのか。本稿では、意識や価値観を問ういくつかの質問との関連を見ることで、その問題を考察する。

男女に違いがみられた構造的なSCに注目し、年代と最終学歴を制御変数として、意識を問う質問との偏相関係数を示したのが表10である⁽⁵⁾。これをみると、各SCの指標と意識との関連が男女で大きく異なることがわかる。

まず、男性からみてみよう。男性にとっては結合型の地縁・血縁的なネットワークが重要な意味をもっていることがわかる。特に、「社会問題に関心がある」「自分と意見の異なる人の話を聞く」といった市民性や寛容性に関する意識と正の関連がある。ただし、この寛容性はジェンダーや家の問題には発揮されていない。性別分業や性役割には結合型SCは関連を示さず、家意識については伝統的な考え方と結びついている。個人的ネットワーク（個人型）や市民的・社会的ネットワーク（橋渡し型）も、ジェンダーや家意識との関連を示さない。つまり、男性のジェンダー意識にはいかなる社会関係資本指標も相関がみられない。

これに対し、女性にとって、もっとも市民性や寛容性意識との関連がみられるのは、個人的なネットワークである。学校時代からの友人や趣味を通じたネットワークがSCとして重要な意味をもっていることがわかる。また、ジェンダー意識と関連があるのは、職場のネットワークである。友人数を男性の友人、女性の友人、という性別で分けて見た場合、特に男性の友人数との相関係数が高くなっており、職場で性別の壁を越えた活動をすることが、女性の性役割意識と関連していることがうかがえる。

女性にとって伝統的な役割であるケア活動を通じたつながりについては、自尊心とは関係しているが、社会問題への関心や寛容性、ジェンダー意識に対しては関連がみられない。

表10 構造型SC：ネットワークと価値意識の偏相関係数(制御変数：年代，最終学歴)／男女別

男 性	個人的ネットワーク			市民的・社会的ネットワーク		地縁・血縁的なネットワーク			ケアネットワーク		
	スポーツ・趣味・学習・娯楽活動	学校時代からの友人	娯楽や趣味の友人	ボランティア・NPO・市民活動	職場や仕事関係の友人	地縁的な活動	親戚の友人	近所の友人	P T A 活動	子どもや学校関係の友人	育児や介護関係の友人
さまざまな社会問題について関心がある	.000	.080	.098	-.033	.098	.001	.119*	.188**	-.055	.035	.056
選挙があると投票に行く	.016	.023	.089	-.040	.134*	.026	.063	.066	.027	.054	.017
意見や立場が違う人の話を聞く	.036	.120*	.019	.075	.067	.107*	.157**	.153**	.022	.640	.090
自分とは人並みには価値がある	.030	.079	.052	-.076	.136*	.043	.118*	.121*	.092	-.012	.119*
夫は外、妻は家庭を守るべき	-.063	-.042	-.011	-.044	-.016	-.032	.016	-.010	.009	.010	-.059
公的な決定は男性が適している	.027	-.010	.068	.026	.077	.017	.054	-.009	.011	.046	-.045
親の面倒を見るのは長男の義務	.005	.035	-.027	-.019	.070	.114*	.062	.034	.047	.093	.059
家の跡継ぎは必要である	.004	.061	.026	-.015	.069	.121*	.147**	.060	.000	.039	.040

女 性	個人的ネットワーク			市民的・社会的ネットワーク		地縁・血縁的なネットワーク			ケアネットワーク		
	スポーツ・趣味・学習・娯楽活動	学校時代からの友人	娯楽や趣味の友人	ボランティア・NPO・市民活動	職場や仕事関係の友人	地縁的な活動	親戚の友人	近所の友人	P T A 活動	子どもや学校関係の友人	育児や介護関係の友人
さまざまな社会問題について関心がある	.128**	.134**	.134**	.093*	.067	.066	.136**	.091*	.060	.074	.001
選挙があると投票に行く	.099*	.045	.063	.040	.003	.109*	.057	.037	.034	.050	-.033
意見や立場が違う人の話を聞く	.118**	.058	.060	.053	.015	.036	.056	.051	.042	.014	.054
自分とは人並みには価値がある	.024	.056	.071	.076	.146**	-.026	.099*	.076	.103*	.090*	.096*
夫は外、妻は家庭を守るべき	.047	-.041	.006	.066	-.109*	.011	-.007	-.022	.026	.030	.065
公的な決定は男性が適している	.045	.012	-.019	.037	-.098*	.018	.008	-.065	-.027	-.060	-.014
親の面倒を見るのは長男の義務	.000	.083	.003	.062	.004	.050	.059	-.010	.026	-.038	.030
家の跡継ぎは必要である	.009	.069	.020	-.019	.057	-.011	.116**	.036	-.061	-.076	-.030

***は0.1%水準，**は1%水準，*は5%水準で有意

以上から、地縁血縁ネットワークが強い男性と、ケアネットワークが強い女性という性別分業を維持したまま、社会活動やネットワークの強化をはかっても、男性のジェンダー問題意識や女性の市民意識醸成にはあまり効果がないことが推測できる。

なお、認知型 SC と価値意識との関連については表11に示した。こちらは、男女による差異はあまりみられない。信頼感と市民意識や寛容性に正の相関がみられる。その点では、社会の信頼感が高まる社会政策を考案すること、特に、男性の一般的信頼と性役割意識に逆相関がみられることから、一般的信頼を高める方策が重要なかもしれない。

表11 認知型SC：信頼感と価値意識の偏相関係数(制御変数：年代，最終学歴)／男女別

	認知型SC：男性			認知型SC：女性		
	一般的信頼	特定化信頼		一般的信頼	特定化信頼	
		結合型	橋渡し型		結合型	橋渡し型
さまざまな社会問題について関心がある	.136*	.188***	.295***	.074	.143**	.133**
選挙があると投票に行く	.152**	.128*	.053	.163**	.254***	.154**
意見や立場が違う人の話を聞く	.156**	.198***	.230***	.154**	.158**	.152**
自分は人並みには価値がある	.284***	.128*	.059	.262***	.161**	.130**
夫は外、妻は家庭を守るべき	-.021	-.004	-.068	.035	-.018	-.092
公的な決定は男性が適している	-.171**	-.018	-.066	.061	.029	-.030
親の面倒を見るのは長男の義務	.007	.087	-.067	-.019	.016	.009
家の跡継ぎは必要である	-.001	.262***	.098	.077	.162**	.095*

***は0.1%水準，**は1%水準，*は5%水準で有意

4. 結論

社会関係資本と人々の意識との関係についてジェンダー視点から分析した結果、以下のことが明らかになった。

まず、認知的な SC より構造的な SC の方にジェンダー差があらわれる傾向があり、男性は結合型 SC が、女性はケア型 SC が多い。その構造型 SC と市民意識との相関をみると、男性にとって結合型 SC は一般的な社会問題意識や寛

容性とは関連を示すが、総じてどの資本についてもジェンダー意識には無関連である。その意味で、SC量を増やすために地域や社会のつながりを密にしようという政策は、男性の市民的な意識や活動には部分的には影響を与えるかもしれない。また、個人的な趣味つながりは、孤独感の解消には役立つかもしれない。しかし、ジェンダー公正との関連はあまりなく、ジェンダーブライントなSC政策では、男女不平等の再生産につながるという危惧はある程度妥当性をもった批判だといえる。

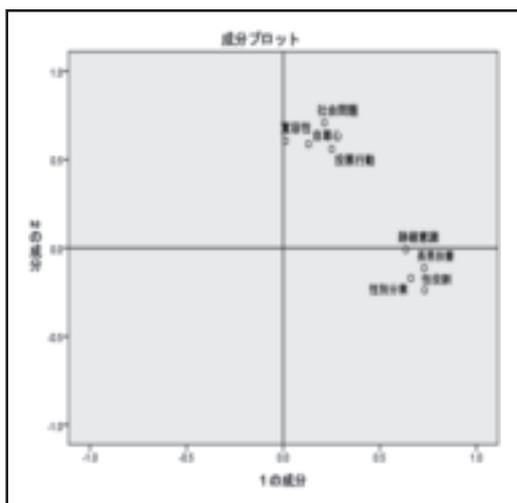
女性の構造型SCについても同様である。伝統的な性別分業の枠組みに沿った形でのSC醸成は市民的な意識に関しては意味をもたない。市民意識ともっとも関連しているのは個人的なネットワーク、ジェンダー平等意識と関係しているのは職場でのネットワークである。女性の伝統的な役割であるケア型のネットワークは、女性にとっては個人的なつながりの対極的な位置づけにあり、市民意識やジェンダー意識とはほとんど関連しない。

したがって、課題1についていえば、異質性と同質性という軸に着目してつくられた結合型—橋渡し型、という従来の類型は、男性の方により適合的といえるかもしれない。女性の場合はケアか個人化か、ということがSCを検討する上では必要である。つまり、家やケア活動から離れた個人的なつながりや職場のネットワークが女性のSC政策では重要な意味をもっている。

一方では女性は男性よりも保持する社会関係資本の量が多いこと、他方では女性は男性よりも政治活動への参加が弱いこと、という調査結果がしばしば公表される。SCは政治的関与を促進させる、というパットナムの主張からすれば、この二つの結果の併存は矛盾していることになる。この矛盾が生じた理由は、パットナムが社会関係資本のジェンダーによる質の違いを分析しなかったからである。女性は男性よりインフォーマルなネットワークに埋め込まれ、ケア型・共感型の活動をしているため、女性の社会関係資本は政治的資源に転換されない。そのため、女性の保有する社会関係資本は、女性の政治参加につながるどころか、逆に疎外することにもなる(Lowndes 2006)。女性の得意分野を生かすというより、従来の性別役割とは異なる活動やネットワークを育成することが必要であろう。

次に課題2についてであるが、従来、政治性や市民性との関連で注目された社会関係資本は、ジェンダー問題に関して、特に男性の場合、ほとんど関連がない。これは、政治や社会問題、寛容性の意識と、ジェンダーや家の問題が、別の型の社会問題と認識されているからである。相関関係を見る際に使用した意識項目を主成分分析した成分プロットをみても(図2)、両者が別グループにすることがわかる。パットナムが、自由で寛容な社会を実現する上で社会関係資本が有用だと主張したとき、外国人とコミュニティ問題のデータをその根拠とした(パットナム2000)。しかし果たして、同じ議論がジェンダー問題にあてはまるかどうかは注意が必要である。

図2 価値意識の主成分分析成分プロット



今回は、単純な相関関係のみを検討した。その点で、さらに精緻な検討が望まれる。ただいえることは、個人か共同体か、リベラリズムかコミュニタリアニズムかといったフォーマルな領域での議論だけでは、ジェンダー問題をふまえた社会関係資本の議論はできない。家庭やケア活動という領域へのまなごしをいれた社会関係資本政策が求められる。

【付記】

本研究は、平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(c) (課題番号23530656) による成果の一部である。

【注】

- (1) 稲葉陽二(2008)では、ソーシャル・キャピタル概念が注目をあびるようになった経緯を紹介するとともに、その多様な概念の整理を行っている。
- (2) Hall(1999)が行った分析では、組織への参加や活動時間などが分析されたが、男女の格差があまり見られなかったこともジェンダー問題を提起しなかった理由として考えられる。
- (3) 表6は全回答者を対象とした分析結果であるが、小学生～高校生の子どもが家庭にいる回答者287名のみを対象にしても因子負荷量のパターンは同じである。
- (4) 男性は、この質問に回答した520人中、子供関係では94.3% (481人)、介護関係は95.9% (489人) が0人と記述している。女性では、育児や子ども関係の知人が0人と答えたものは77.5% (542人)、介護関係が0人は90.1% (630人) である。男性の10.3% (46人)、女性の26.2% (195人) はどちらかの友人が一人以上いると回答している。
- (5) 意識を問う質問は、それぞれ4段階で回答してもらい、4から1のスコアを当てた。

【引用文献】

- Bezanson, K., 2006, "Gender and the limits of social capital", *Canadian Review of Sociology and Anthropology*, 43(4) : 427-443.
- Bourdieu, P., 1986, "The Forms of Social Capital", in *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, ed.J.G.Richardson, Greenwood, 241-258.
- Erickson, B.H., 2006, "Persuasion and Perception" in *Gender and Social Capital*, ed, B.O`Neill & E.Gidengil, Routledge, 293-322.
- Field, J., 2008, *Social Capital* (second edition), Routledge.
- Foster, M.K & A.G.Meinhard, 2005, "Women's Voluntary Organizations in Canada: Bridgers,

- Bonders, or Both?" *Voluntas: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, Vol16, No2 : 143-160.
- Hall, P.A., 1999, "Social Capital in Britain" *British Journal of Political Science* 28:417-461.
- 稲葉陽二, 2008, 『ソーシャル・キャピタルの潜在力』日本評論社.
- 2011, 『暮らしの安心・信頼・社会参加に関するアンケート調査』2010年社会関係資本全国調査の概要』『政経研究』48(1), 107-130.
- Lowndes, V., 2006, "It's Not What You've Got, But What You Do With It: Women, Social Capital, and Political Participation", in *Gender and Social Capital*, ed. B.O'Neill & E.Gidengil, Routledge, 213-240.
- 三菱総合研究所, 2011, 『教育改革の推進のための総合的調査研究 ～教育投資が社会関係資本に与える影響に関する調査研究』
- 宮田加久子・池田謙一, 2011, 「社会関係資本が政治参加に及ぼす効果 — ジェンダーの視点からの因果分析 —」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』136, 1-25.
- Molyneux, M., 2002, "Gender and the Silences of Social Capital : Lessons from Latin America" *Development and Change* 33, no.2:167-88.
- 内閣府, 2003, 『ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』
- 2005, 『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』
- 日本総合研究所, 2008, 『日本のソーシャル・キャピタルと政策』
- 西出優子, 2005, 「ソーシャル・キャピタルの形成における女性の役割」(山内直人・伊吹英子編『日本のソーシャル・キャピタル』大阪大学大学院国際公共政策研究科 NPO 研究情報センター) 第11章.
- O'Neill, B & E.Gidengil, 2006, *Gender and Social Capital*, Routledge.
- Putnam, R., 1995, "Bowling Alone: America's Declining Social Capital" *Journal of Democracy* 6, no.1 : 65-78.
- , 2000, *Bowling Alone : The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster (柴内康文訳『孤独なボウリング — 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房, 2006.).